

子育てサークル参加者における参加の意味の検討

A study on the meaning of participation in the circle for childcare

佐藤 京子^{※1}

Kyoko Sato^{※1}

Abstract

An investigation of the present situation of participants, change in the behavior and human relation after participation and meaning of participation in the circle for childcare was conducted by a mailed questionnaire survey on 490 members and 28 leaders in this circle, the following results were obtained.

1. The first opportunity of participating in the circle was dependent on the order of birth and birthplaces of mothers, and the purpose of joining in the circle was related to their birthplaces.

2. The first purpose of participation in the circle was for children (playmates and playing space), the second was for mothers (friend, communication and enjoyment) and the third was for childcare (information and relief of anxiety). After participation in the circle, mother herself, and childcare showed the most well-defined changes in the conference, friendship, full life, method for playing children, self-confidence for childcare and clear changes appeared in children (sociality and playmate), while there were few changes in the married life and relation to husband (interesting in childcare, housework and conversation). These findings indicate that mother herself is rather changed although she participated in the circle for children, and there is a relationship between the purpose of participation, change in the human relation after participation and meaning of participation in the circle for childcare.

3. Most of participants placed a high value on joining in the circle. They recognized the value of participation in the circle on the growth of children and interchange of fellow children, and the interchange and conference of fellow mothers and their full lives, indicating that participation in the circle has the effect on the social relation and emotional aspect of mother.

4. The present investigation suggests that it is necessary to consider appropriate measures at the time of pregnancy, afterbirth or change of address in order for child-rearing mother to have a timely chance for participation in the circle, and health and medical institutions have to support actively and to be concerned intentionally in the introduction of circle, promotion of participation and growth of circle.

キーワード: コミュニティー, 子育てサークル, 友達づくり, 相互支援, 参加の意味
Community, Circle for childcare, Friends-making, Mutual support,
The meaning of participation

I 緒言

1. 本研究の背景

わが国における急激な少子化と高齢化の進展は

人口構成のアンバランス, 将来の社会経済活動, そして子どもの育ち方への影響等が懸念されている。また, 核家族化, 生活スタイルの多様化そし

※1 宮崎医科大学医学部看護学科 地域看護学講座 Miyazaki Medical College, School of Nursing

て地域社会の変化などにより、育児の孤立化や育児不安の増大などの問題が指摘されている。女性は出産と同時に24時間の育児に追われ、睡眠不足や過労などの身体的負担とともに、子どもへの責任等の心理的負担を持つ。現在の若い女性は、建前上ではあれ、教育や就労における平等を獲得し、経済的、時間的そして生活行動面においても制約が減少している状況で、子育ての負担が一層強く感じられることは想像に難くない。未婚者や子どものいない共働き夫婦（DINKS）の増加はこのような子育て事情の反映でもある。

21世紀初頭における母子保健の国民運動計画である「健やか親子21」の主要課題の1つとして掲げられている「子どもの心の安らかな発達の促進と育児負担の軽減」を達成するための目標として、「子育てに自信が持てない母親の割合の減少」が設定され、そのための地域における具体的な取組として、保健所や市町村における「親子のグループ活動に対する支援」や「自主的な育児グループの育成」等が示された。また、地方自治体の保健、福祉そして社会教育などの部門では、1980年頃より地域の実情や住民の要望に応じて新しい子育て支援の事業が実施されている。保健衛生部門では、保健師は地域組織活動の一環として、母親学級、乳幼児健診、家庭訪問などを契機とする母親のグループ育成や住民の自主的グループへの援助を進めている。

Y県における子育て支援は、従来から母子愛育班や保健推進員等の活動が活発であるが、近年、住民が自主的に組織した子育てサークルも活発になっている。10年ほど前に保母経験者が中心となって子育てサークルをつくり、活動拠点を建設して会員制の子育てクラブや幼児教室を開設し、その終了者らが近隣で子育てサークルをつくっていった。また、地域全体に呼びかけた親子夏祭りなどのイベントの開催、OG会（子どもが幼稚園や保育園そして小学校へ進んだ後の母親のサークル）によるリーダーへの援助、サポーターの育成、市町村の幼児教室講師など県内全域に活動の輪を広げていった。4年目にサークル活動の交流組織を10サークルで結成し、2001年現在OG会12を含む

40サークルが参加している。この中には保健師が育成したグループの一部も参加している。現在、この活動交流組織はOGによる事務局を中心に通信の発行、サークル代表者会議、サークル活動相談、キャラバン（移動幼児教室）、育児用品のリサイクル、子どもフェスティバルの開催等を行い、親子がいきいきと活動に参加している。

育児の孤立化や育児不安の増大が指摘されている中で、子育て環境の充実が求められている。地域保健分野においては、既存の地域組織との連携と共に、子育てグループの育成や自主的な子育てサークルとの連携など子育て当事者の自助・互助による育児力形成が課題である。

本研究は、この活動交流組織が自主的につくられY県のほぼ全域にわたるサークルを擁していること、そしてサークル代表者と参加者全員を対象とした調査が可能であり、参加の前後についての調査が可能であった点において特色をもっている。

2. 研究枠組み

子育てグループに関する先行研究に関しては、1993から1999年の「育児」及び「支援」をキーワードに文献検索を行い、この中で「グループ」又は「サークル」をテーマにした文献について内容を検討した。

まず、「グループづくりの契機」に関しては公的機関が関与している割合は東京都の77%¹⁾、関西2府4件の3割²⁾及び福岡県2割³⁾であった。公的機関の内容は多い順に児童館、保健所・保健センター、区民館・公民館等であった¹⁾。その他の多くは保健所や市町村において保健師らが組織し、育成したグループ^{2)~11)}であり、こどもの城の赤ちゃんサロンのグループ¹²⁾もあった。また、「グループ活動の効果」としては、母親側では育児不安の解消できる、自尊感情を取り戻せる、友達ができる、母親同士の支え合いができる、情報が得られる、子どもを客観的に見られる、子育てのハウツーが得られる、子ども側の効果としては子供が生き生きとできる、仲間ができるなど^{1)~10),12)}があげられていた。更に「子育てグループのネットワーク化や街づくり」の観点から、若い子育て

世代の果たす役割¹¹⁾の重要性をあげていた。サークル参加者に対する「参加後の変化」と「参加の意味」を問う研究は見あたらない。

先行研究の検討に加えて、本研究の前年に著者らが実施した『子育てサークル「ちびっこはうす」参加者調査』結果¹²⁾に基づいて作成した本研究の枠組みを図1に示した。出産・子育てで直面する問題に対する相互援助機能の1つとして子育てサークルに出会い、参加し、生活に活かし、参加の意味を考えるという行動プロセスを設定し、これらと個人の特性（母親の年齢、家族構成、子どもの数、居住契機）との関係をみた。本研究では図の「二重枠」の部分を検討対象とした。

3. 用語の定義

本研究において「子育てグループ」は子育て期の養育者（多くは母親）達がよりよい子育てを目指して組織されている集団、「子育てサークル」は対象も目的も同様であるが自主的に組織している集団と定義する。一般的に「グループ」とは仲間、集団、共通の性質で分類した人や物の一団、群と、また「サークル」とは関心や趣味を同じくする人の集まり、同好会と定義されている¹⁴⁾。本研究の対象は多くが自主的サークルであり、市町村の保健師らが組織したグループも活動交流を通

して連携を強め共同行動も行っていることから、「子育てサークル」と総称した。

4. 研究目的

本研究は、住民が自主的に結成した子育てサークルの活動の実状、参加状況及び参加後の参加者自身と家族の変化を把握し子育てサークル参加の意味を検討することにより、地域の子育てサークル育成における看護職の役割を明らかにするための示唆を得ることを目的とした。

II. 方法

1. 調査対象及び調査方法

1) 調査1：サークル代表者調査

Y県内の育児サークル活動交流組織に加入している28サークルの代表者を対象に、平成12年10月～12月に自記式調査票による調査を行った。調査票の配布はサークル代表者会議において説明の上、依頼した。回収は個別郵送によった。回収数は22（回収率78.6%）であった。

2) 調査2：サークル参加者調査

調査1と同時期に活動交流組織に加入している28サークルの会員490人を対象に自記式調査票による調査を行った。調査票は代表者に会員への配布を依頼し、回収は個別郵送によった。

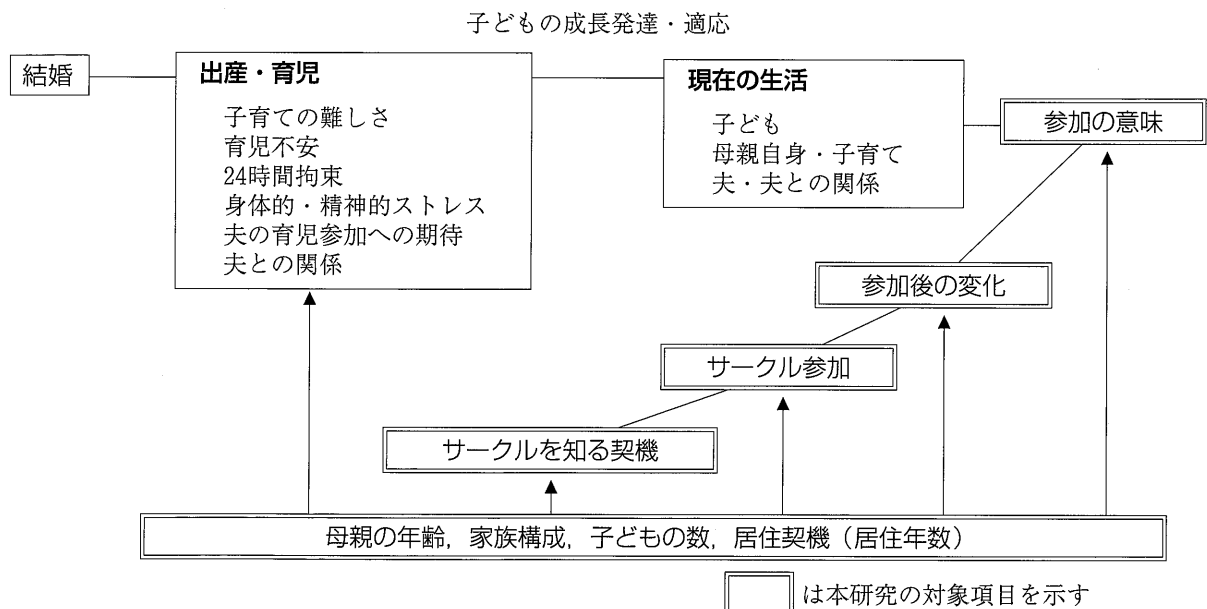


図1 研究枠組み

回収数は27サークルから281（回収率57.2%）、有効回答数279（有効回収率56.8%）であった。

2. 調査内容

- 1) 調査1：サークルの継続年数、会員数、活動回数、活動時間、参加する子どもの年齢、活動内容、サークル代表者の年齢について質問した。
- 2) 調査2：(1)サークル参加者の特性に関する項目として年齢、職業、最終学歴、家族構成、家族数、子どもの数、夫の職業、Y県居住年数、Y県に住むきっかけ（以下、居住契機と略す）、親の居住地及び夫の親の居住地、(2)子育てサークルへの参加に関する項目としてサークルを知った契機、サークル参加動機、参加して願いが叶ったか、参加後の参加者と家族の変化及びあなたにとってのサークル活動参加の意味（以下、参加の意味と略す）で構成されている。回答の選択肢は表1～表4に示した。

3. 倫理的配慮

- 1) 調査は無記名で行い、データは数量的に処理解析するので、個人は特定されない。また、研究以外には使用しない。
- 2) 調査票の回収は研究者宛の郵送とした。
- 3) 上記の2点を明記し調査を依頼した。

4. 統計解析

参加者の特性（年齢、家族構成、子どもの数、居住契機）と参加に関する項目の関係を検討した。その際、データの分布状態や回答の性格により年齢は3区分（29歳以下、30～34歳、35歳以上）、居住契機は2区分（県内出身者、転入者）と、サークルを知った契機、参加理由、参加して願いが叶ったか、参加後の変化及び参加の意味は表2～4の中区分のように区分した。無回答は除外した。

統計解析は「秀吉 for Windows」を用い、カイ二乗検定を行った。

Ⅲ. 結果

1. サークル活動及び代表者の状況

継続年数別のサークル数は3年未満は6（27.3

%）、3～5年は6（27.3%）、5年以上が10（45.5%）であり、最長10年であった。会員数は10～45人、平均 17.3 ± 5.3 人であった。参加する子どもの年齢分布は2歳児が最も多く40%、1歳児27%、3歳児18%であった。活動回数は1か月当たり4～5回が64%、1～3回32%、活動時間は平日の午前中が多く、活動内容は多いものから子どもの遊び、手作りおもちゃ、母親の交流、育児相談・情報交換、専門家との会話となっていた。リーダーの平均年齢は 31.6 ± 2.4 歳であった。

2. サークル参加者の特性

サークル参加者（以下、参加者と略す）の特性を表1に示した。平均年齢は 31.7 ± 3.6 歳、年齢階層別では30～34才が半数以上である。職業はなし86.0%、有職者のうち育児休業中が1人あった。家族構成は核家族が最も多く73.2%、家族数は平均 4.3 ± 3.1 人、子どもの数は平均 1.8 ± 0.9 人であり、2人が最も多く約半数を占めていた。Y県居住年数は平均 21.3 ± 12.9 年であり、県内出身者と転入者の2層を示した。Y県居住契機は県内に出身地のある人（以下、県内出身者と略す）が59.1%、結婚・夫の転勤・就職等による居住者（以下、転入者と略す）が39.0%であった。自分の親との同居及び近居は24.0%、夫の両親との同居及び近居は47.3%であった。

3. 育児サークルへの参加、参加後の変化及び参加の意味

1) 育児サークルへの参加状況

サークルの所在地は16市町村に存在し、回答者の8割は居住市町村内のサークルに参加していた。集まりには平均1.4人の児を連れて参加し、第1子が約半数を占めていた。

2) サークルを知ったきっかけと参加理由（表2）

サークルを知った契機は「友人・知人に誘われて（以下、友人等と略す）」が最も多く、「市町村の広報・紹介」「チラシ・ミニコミ紙（以下、チラシ等と略す）」「人のうわさ・口コミ（以下、口コミ等と略す）」と続いていた。友人や口コミ等の直接的で身近なところからの情報

表1 回答者の特性

N=279 人 (%)

| 年齢 | 平均年齢 | 31.7±3.6歳 (22~40歳) | Y県居住年数 | 平均 | 21.3±12.9年 (0~40年) | |
|-------|------------------|--------------------|---------|---------|--------------------|-----------|
| | 24歳以下 | 4 (1.4) | | 4年以下 | 50 (17.9) | |
| | 25~29歳 | 61 (22.0) | | 5~9年 | 38 (13.6) | |
| | 30~34歳 | 153 (55.3) | | 11~14年 | 10 (3.6) | |
| | 35歳以上 | 59 (21.4) | | 15~19年 | 4 (1.4) | |
| 職業 | なし | 240 (86.0) | Y県に住む契機 | 20~24年 | 11 (3.9) | |
| | あり | 28 (10.0) | | 25~29年 | 45 (16.1) | |
| | 勤め人 | 8 (2.9) | | 30年以上 | 119 (42.1) | |
| | パート・アルバイト | 11 (3.9) | | 無回答 | 2 (0.8) | |
| | 自営業 | 5 (1.8) | | 出身地 | 167 (59.1) | |
| | その他 | 4 (1.4) | | 結婚 | 55 (19.8) | |
| | 無回答 | 11 (3.9) | | 夫の転勤 | 38 (13.7) | |
| 最終学歴 | 中学・高校 | 107 (38.4) | | その他 | 15 (5.5) | |
| | 専門学校・短大 | 135 (48.4) | | 無回答 | 4 (1.4) | |
| | 大学以上 | 35 (12.5) | 親の居住地 | 同居・近居 | 67 (24.0) | |
| | 無回答 | 2 (0.7) | | 車で30分以内 | 86 (30.8) | |
| 家族構成 | 核家族 | 204 (73.2) | | 車で30分以上 | 32 (11.5) | |
| | 3世代・その他 | 71 (25.4) | | 県外 | 90 (32.3) | |
| | 無回答 | 4 (1.4) | いない | 4 (1.4) | | |
| 平均家族数 | 4.3±3.1人 (3~10人) | | 夫の親の居住地 | 同居・近居 | 132 (47.3) | |
| 子どもの数 | 平均 | 1.8±0.9人 (1~4人) | | | 車で30分以内 | 46 (16.5) |
| | 1人 | 95 (34.1) | | | 車で30分以上 | 30 (10.8) |
| | 2人 | 137 (49.1) | | | 県外 | 66 (23.7) |
| | 3人以上 | 47 (16.8) | | いない | 5 (1.8) | |
| 夫の職業 | 勤め人 | 245 (87.8) | | | | |
| | 自営業・農業 | 26 (9.3) | | | | |
| | その他 | 5 (1.8) | | | | |
| | 無回答 | 3 (1.1) | | | | |

表2 サークルへの参加

N=279

| 項目 | 中区分 | 回答項目 | 人 (%) | 中区分計 % |
|--------------|------------------|---------------|------------|-----------|
| サークルを知ったきっかけ | 直接的・対面的コミュニケーション | 友人・知人に誘われて | 151 (54.1) | 62.0 |
| | | 人のうわさ・口コミ | 22 (7.9) | |
| | 行政からの情報 | 市町村の広報・紹介 | 46 (16.5) | 16.5 |
| | | ミニコミ・マスコミ | チラシ・ミニコミ紙 | 32 (11.5) |
| | | 新聞・テレビ・ラジオ | 12 (4.3) | |
| | | その他 | 15 (5.4) | 5.4 |
| | 無回答 | 1 (0.4) | 0.4 | |
| 参加の一番の理由 | 子どものため | 子どもに友達がほしかった | 108 (38.7) | 50.5 |
| | | 子どもの遊び場がほしかった | 33 (11.8) | |
| | 自分自身・子育てのため | 情報がほしかった | 10 (3.6) | 44.4 |
| | | 育児に不安があった | 3 (1.1) | |
| | | 自分に友人がほしかった | 45 (16.1) | |
| | | 家に閉じこもりたくなかった | 42 (15.1) | |
| | | 楽しそうだった | 24 (8.6) | |
| | その他 | 9 (3.2) | 3.2 | |
| 不明 | 5 (1.8) | 1.8 | | |
| 参加して願いが叶ったか | はい | 233 (83.5) | 83.5 | |
| | その他 | いいえ | 3 (1.1) | 15.1 |
| | | どちらとも言えない | 39 (14.0) | |
| | 無回答 | 4 (1.4) | 1.4 | |

が62.0%と多く、市町村の広報・紹介、チラシ等も情報源になっていた。

サークル活動に参加した1番の理由は子どものための50.5%、育児のため(情報がほしい、育児不安)4.7%、自分のため(友人がほしい、閉じこもりたくない、楽しそう)39.8%であった。その他には子どもと自分のための両方という記述が、また、不明は複数回答があったことなどから、複数の理由が重なっていることが伺えた。

サークルへの参加により願いが叶ったか(以下、願いが叶ったかと略す)は「はい」が83.5%であったが、どちらともいえないが14%あった。

3) サークル参加後の変化(表3)

サークル参加後に変化したこと(以下、参加後の変化と略す)の複数回答(以下、MAと略す)では、子どものこと「社会性が育った、友達ができた」は78.1%と最も多く、「生活が規則的になった」は10.8%であった。続いて、自分自身のこと(生活が充実した、相談できる、友人ができた)が65~58%で続き、子育てのことが40~34%、夫のことや夫との関係は37~4%であった。変化しなかったこと(MA)は変化しなかったことのほぼ逆になっている。

また、一番変わったこと(単数回答、以下SAと略す)では、自分自身のこと・子育ての

表3 サークルに参加後に変化したこと

N=279

| 中区分 | 回答項目 | 変化したこと | | | 中区分計 % |
|-------------|----------------|------------------------|---------------------------|--------------------------|-----------|
| | | 変化したこと (MA) 人(%) | 変化しなかつたこと (MA) 人(%) | 一番変わったこと (SA) 人(%) | |
| 子どものこと | 生活が規則的になった | 30 (10.8) | 179 (64.2) | 1 (0.4) | 31.2 |
| | 社会性が育った・友達ができた | 218 (78.1) | 34 (12.2) | 86 (30.8) | |
| 自分自身・子育てのこと | 遊ばせ方が上手になった | 112 (40.1) | 94 (33.7) | 9 (3.2) | 44.7 |
| | 子育てに自信がついた | 96 (34.4) | 102 (36.6) | 11 (3.9) | |
| | 生活が充実した | 163 (58.4) | 65 (23.3) | 39 (14.0) | |
| | 相談ができるようになった | 182 (65.2) | 48 (17.2) | 28 (10.0) | |
| | 一緒に行動する友人ができた | 178 (63.8) | 56 (20.1) | 38 (13.6) | |
| 夫のこと・夫との関係 | 育児に関心をもつようになった | 39 (14.0) | 163 (58.4) | 0 | 1.4 |
| | 夫婦の会話が増えた | 103 (36.9) | 115 (41.2) | 4 (1.4) | |
| | 家事時間が増えた | 12 (4.3) | 203 (72.8) | 0 | |
| | 夫が自分のことを認めてくれる | 24 (8.6) | 178 (63.8) | 0 | |
| 不明 | | 0 | 0 | 3 (1.1) | 1.1 |
| 無回答 | | 19 (6.8) | 38 (13.6) | 60 (21.5) | 21.5 |

表4 あなたにとっての子育てサークル参加の意味

N=279

| 中区分 | 回答項目 | 大切なこと | | 中区分計 % |
|-------------|-------------|--------------|-------------------------|-----------|
| | | (MA) 人(%) | 最も大切なこと (SA) 人(%) | |
| 子どものこと | 子どもに仲間集団の経験 | 261 (93.5) | 144 (51.6) | 52.7 |
| | 親以外の大人との交流 | 56 (20.1) | 3 (1.1) | |
| 自分自身・子育てのこと | 育児に関する情報 | 203 (72.8) | 21 (7.5) | 23.6 |
| | 親が遊ばせ方を学ぶ | 78 (28.0) | 0 | |
| | 他の母親との交流 | 233 (83.5) | 23 (8.2) | |
| | ストレス解消 | 147 (52.7) | 11 (3.9) | |
| | リフレッシュの場 | 133 (47.7) | 10 (3.6) | |
| | 行政とのパイプづくり | 6 (2.2) | 1 (0.4) | |
| 無回答 | | 3 (1.1) | 66 (23.7) | 23.7 |

こと44.8%，子どものこと31.2%，夫や夫との関係は1.4%であった。

4) サークル活動の意味 (表4)

「あなたにとってのサークル活動参加の意味」を問う質問の結果を表4に示す。大切と思うこと(MA)は、子どもの集団遊び体験が93.5%で最も多く、続いて母親同士の交流、育児情報がいずれも70%以上であった。最も大切と思う意味(SA)では子どものことが半数以上であり、自分自身のこと、子育てのことと続いた。無回答が23.7%であった。

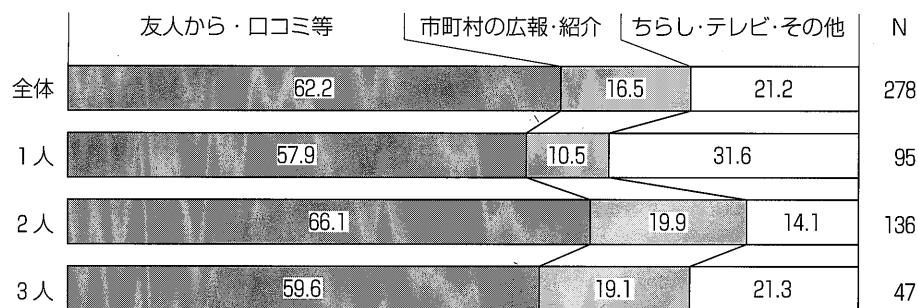
4. サークル参加と参加者の特性

サークル参加に関する項目と参加者特性において、有意な関連が認められた項目を図2に示した。サークルを知った契機は子どもの数 (P<0.05)

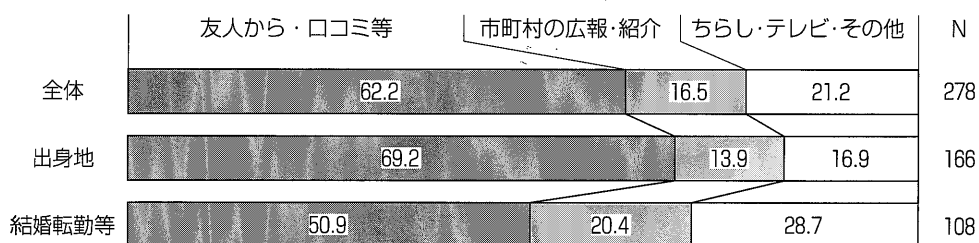
及び居住契機 (P<0.01) との関連が認められた。子どもの数では「直接的対面的コミュニケーション」の割合が高いのは子どもが2人>3人以上>1人の順であり、「ミニコミ・マスコミ」は1人>3人以上>2人であった。また居住契機では、県内出身者は「直接的対面的コミュニケーション」が多く、転入者は「ミニコミ・マスコミ」が比較的多い。サークル参加理由は居住契機による差異が認められた (P<0.05)。参加理由に「子どものため」を第1にあげたのはY県出身者が転入者よりも多く、「自分自身と子育てのため」は転入者が比較的多かった。

「参加して願いは叶ったか」、「一番変化したこと」及び「参加の意味」は参加者特性との有意な差は認められなかった。

1) 子どもの数とサークルを知ったきっかけ (P<0.05)



2) 居住契機とサークルを知ったきっかけ (P<0.01)



3) 居住契機とサークル参加理由 (P<0.05)

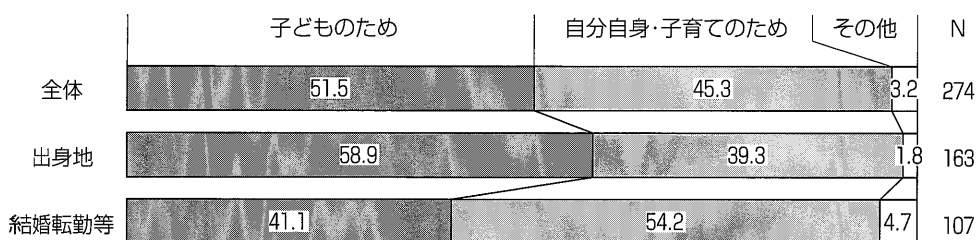
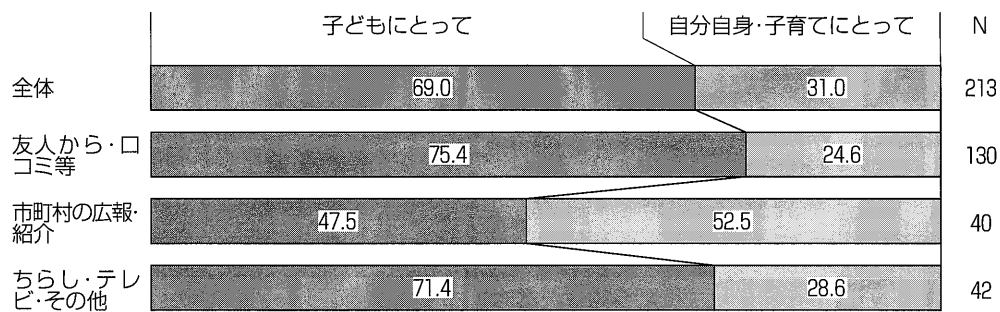
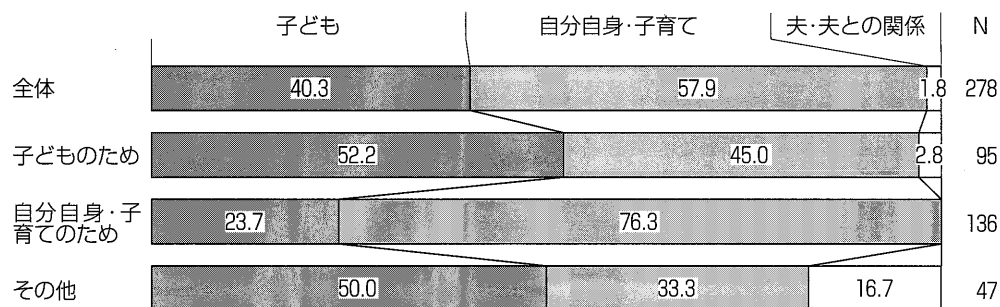


図2 サークル参加と参加者特性の関連性

1) サークルを知ったきっかけと参加の意味 (P<0.01)



2) サークル参加理由と参加後の変化 (P<0.001)



3) サークル参加理由と参加の意味 (P<0.001)

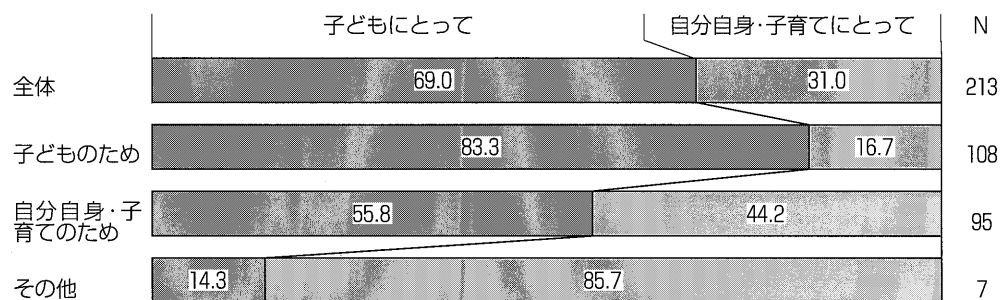


図3 サークル参加に関する項目間の関連性

5. サークル参加に関する項目間の関連

サークル参加に関する5設問の相互関連を検討した結果、有意な関連が認められた項目を図3に示した。「サークルを知った契機」によって「参加の意味」が異なっていた (P<0.01)。また、「参加理由は「参加後の変化」 (P<0.001) 及び「参加の意味」 (P<0.001) との関連が認められた。参加理由の1番が自分自身と子育てのための人は変化のしたことの1番に自分自身・子育てとした人が多い。参加理由の1番が子どものための人は参加の1番の意味は子どもにとっての意味をあげた人が多い。

また、「願いが叶ったか」に「どちらともいえ

ない」と回答したのは「知った契機」が友人に誘われて64.1%、広報等12.8%が多かった。

IV. 考察

1. サークル活動、代表者及び参加者の状況

継続年数、会員数、活動回数そして活動時間について先行研究^{1),2),3),4),5),12)}と対比すると、会員数と活動時間は大体共通しており、活動回数はやや多く、継続年数はやや長いものが多い。子どもの年齢分布は年令の限定のないグループ^{1),3)}と共通していた。参加者と代表者の平均年齢はほとんど同じであった。

2. 子育てサークル参加の意義

サークルに参加した多くが「願いが叶った」とし、参加後に「子ども」と「自分自身・子育て」に良好な変化を見出し、「子ども」にとっても「自分自身・子育て」にとっても参加の意味を見出し、サークル参加を評価している。

母親自身はサークル参加後に、相談できる、行動できる友人を得た、生活が充実したことを、そして参加の意味に母親同士の交流を上位にあげているように、育児方法よりも社会性や情緒面を重視しているといえよう。子どもについても社会性・友達の変化や子ども同士の交流を大切な意味にあげている。前田ら⁸⁾が自主グループ活動による育児仲間、情緒的相互援助、子どもと自己の客観視の意味をあげていることと符号が合っている。これに対して「夫・夫との関係」は変化が少なく、その中で比較的多いのが「夫婦の会話」の増加であった。わが国の父親の育児参加が少ないこと¹⁵⁾、会話や相談を期待し評価する母親¹⁶⁾もあり、母子中心の家庭生活において、父親へ期待できないところを母親同士の交流と支え合いを行っているともいえよう。

「参加後の変化」と「参加の意味」は「参加理由」と関連が認められたことは、「参加理由」が叶えられたことの裏付けにもなっている。一方、「子どものため」を第1の理由として参加した人も「自分自身と子育て」にかなりの変化をもたらしていることや、反対に「参加理由」の第1が「自分自身・子育て」であっても、「参加の意味」の第1が「子ども」になることもあることは、母親は子育てのさまざまな課題を抱えているとともに、サークル活動が母と子のさまざまな側面に影響していること、を示しているといえる。「願いが叶ったか」に「どちらともいえない」が14%あったことは、上記のように参加時には思っていなかった結果が生じていること及び時間的に評価が困難もあり得るが、後者は検討できなかった。

3. サークル参加の促進

サークルを知った契機は子どもの数と関連していた。子どもが1人の場合や転入者は半数以上は

友人・口コミ等の直接的な手段で情報を得ているがチラシやマスメディアから情報を得ている割合が他より高い。第1子の生後間もない時期は育児不安が強く、日々の育児に追われ外出も困難であり、日々の心配事や疑問が生じる時期に相互援助の意味は大きく、具体的方策の検討が必要である。

居住契機がサークルを知った契機及び参加理由と関連していた。女性は一般的に、結婚・出産を契機に転居することが多い上に、本調査で見られたように自分の親との同居・近居は夫の親とのそれよりも少ないため、身近な相談相手を得ることが困難である。様々な機会を捉えて仲間づくりをしているといえる。先行研究では居住契機と参加に関する検討・知見は見られない。

子育て中の母親がサークルに参加する意味は大きく、適切な時期にサークルを知ることが出発点である。妊娠中あるいは出産後早期の情報が届くことが必要である。転入者もまた、直接的情報が得にくいグループであり、意識的な対応が検討されることが必要である。

看護職は妊娠・出産・育児の各時期に保健施設や医療施設において関わりが大きい。適切な時期にサークルと出会い、参加できること、そしてサークルの誕生と育成に援助することが必要であると考える。

V. 結 語

1. 子育てサークル参加者を対象にしたサークル活動参加状況、参加後の変化及び参加の意味に関して分析し、以下の知見を得た。
 - 1) 自主的に結成した子育てサークルの参加者は社会性や情緒面において参加の意味を評価していた。
 - 2) サークルを知る契機と参加理由は子どもの数と居住契機が関連していた。
 - 3) 参加理由は子どものため、自分自身や子育てのためが多く、参加後の変化及び参加の意味とも対応していた。
 - 4) 子育て中の母親がサークルを知るためには、妊娠中、出産後早期、転入時等に意識的な対応が必要である。特に、看護職は保健施設や医療

施設においてサークルの誕生・育成，参加への具体的援助の検討が必要である。

2. 本研究の限界として，サークル不参加者のとの対比ができていないこと，分析にあたって回答項目の統合を行ったため細部の検討が不十分であり分析方法の再検討が必要があることがあげられる，また，今後の課題として，サークル参加者の生活行動や意識面からの把握が必要であること，及び子育てサークルへの援助に関してはさらに具体的かつ詳細な検討が必要であることがあげられる。

本研究は平成11・12年度山梨県立看護大学共同研究費助成研究として行われた。

文 献

- 1) 田仲ひろ子：少子化時代への対応 子育て支援の実態－東京の子育てグループの調査から，公衆衛生，**59**(6)，378-391，1995
- 2) 楽木章子，原田正文：子育て支援における専門職の役割(1) 子育て自主グループへの支援の実践より，小児保健研究，**57**(2)，183-184，1998
- 3) 前田奈智子，入江 忍，岩橋和代他：母親の求める子育てグループ支援のあり方について，福岡県立看護専門学校紀要，**19**，139-148，1996
- 4) 駒井恵美子，有原友子，工藤依子他：地域における子育て支援事業，公衆衛生，**58**(11)，816-819，1994
- 5) 小島由紀，田中美紀，白髪いづみ他：四谷保健所における子育て支援の取り組み赤ちゃんくらぶ(低月齢児・4回制)の1年を振り返って，東京都衛生局学会誌，**94**，44-45，1995
- 6) 駒井恵美子：地域における子育て支援事業，日本公衛誌，**42**(10特別付録)，454，1995
- 7) 高久裕美：自主的子育てグループの支援活動，地域医療第36回特集，498-500，1997
- 8) 中澤江里香：子育てグループ支援についての現状報告－保健婦，民生委員，児童館が共同して行っている田園調布にここクラブを中心として，東京都衛生局学会誌，**100**，372-373，1998
- 9) 柳田益佐，市村留美，笹井美由紀他：狛江市の子育て支援プログラム－自主活動グループ育成の取り組みから－，東京都衛生局学会誌，**100**，376-377，1998
- 10) 鳥居みゆき，有阪久子，初山喜久代他：南河内町における母子保健の取り組み 子育て支援健康教室「フレッシュママ教室」を実施して，栃木母子衛生，**24**，13-15，1997
- 11) 井手知恵子：地域における育児サークルに関わる看護支援に関する研究，千葉看護学会誌，**3**(2)，34-40，1997
- 12) 中澤恵子：育児グループにおける育児支援，小児科臨床，**48**(増刊)，1515-1523，1995
- 13) 佐藤京子，遠藤俊子，田中久恵他：子育てサークル「ちびっこはうす」参加者調査(1999年度)，平成11・12年度山梨県立看護大学共同研究費助成研究成果報告書，20-35，2001
- 14) 村松明監修：大辞 泉，小学館，**788**，1032，1995
- 15) 厚生省：自立した個人の生き方を尊重し，お互いを支える家族，厚生白書 平成11年版，89-90，1998
- 16) 佐藤京子：父親の育児家事への参加と母親の受けとめ方に関する調査，山梨看護学会誌，**5**,1，54-55，1997